

ブラジリアの都市計画と近代建築を見る視点

近代都市とバナキュラーをワークショップから見る



連 健夫

MURAJI Takeo

有限会社 連健夫建築研究室/代表取締役

1987年ユネスコはブラジルの首都ブラジリアを世界遺産に登録する決定をした。現代都市がこのような栄誉を受けるのは初めてで、ブラジリアはルクソールやタージマハールなど古代建造物に並ぶ地位を与えられた。選考に当たって、ル・コルビュゼ設計の近代都市、チャンディーガルを主張する意見もあったが、選定委員はブラジリアは世界の歴史的財産として相応しい大胆さと独自性のある国家の首都であり、また無から社会的現実となった唯一の都市である点を高く評価したのである。つまり、建築家ルシオ・コスタ設計の計画的近代都市の具現化、そしてその構築物としての建築家オスカー・ニーマイヤーの近代建築がブラジリアの最大の特徴と評価したのである。

我々は、ブラジルの都市と建築を考えるべく、その人工的に突如と生まれた近代都市のブラジリアに加え、400年以上を経て自然に大都市として育ったサンパウロ、今だに土着の生活が見られる小都市、マーシャルデオードロやマセイオを訪問するワークショップを2000年9月に現地の建築家の協力を得て行った。日本から若手建築

家、学生を含む20名が2週間、「バナキュラー(地域性・土着性)からの変換」をテーマに調査・分析・提案を行うワークショップである。この短期集中型のワークショップを経て我々はブラジルの地域性・土着性と共に計画的近代都市と近代建築を考える視点が得られた。

1—計画的都市が求められた背景

1つめの視点は、「エリートとしての計画的近代都市と近代建築が求められた背景」である。サンパウロでの建築会議の中でディスカッションされたことは、「歴史のないブラジルではバナキュラーをテーマとした建築を必要とする基盤が育っていない。建築家には今だに近代建築がエリートのデザインとして求められている」と言うのである。つまり近代建築が近代化、国際レベルのシンボルなのである。ブラジリア遷都もその意味を持ち、そこにはブラジル特有の歴史的背景があった。

ブラジルはポルトガルの植民地時代を通じて西洋に対する劣等感がその意識化にあった国である。1763年までの首都サルバドール、そして1960年までのリオ・デ・ジャネイロいずれも入植の港町として育った都市である。当初リオを中心に西欧化が展開され、第一次世界大戦を契機にサンパウロを中心として近代主義運動が始まった。この工業化の成功と発展によりブラジルは西洋に対する劣等感を克服するに至った。この劣等感からの脱出と国際社会へ肩を並べるためには、そのシンボルが必要であり、また多民族社会のモデルを目指す「人種デモクラシー」の国是のシンボルがブラジリアであった。つまり、当時のブラジルには地域性・土着性からの脱皮としての計画的近代都市が必要であり、それが国際都市、エリートへの仲間入りの重要なシンボルを意味していたのである。



■写真1—ルシオ・コスタ設計の工場を改造してコミュニティセンターにしたSESCファブリカ・ダ・ボンヘイア(サンパウロ) 都市のコンテクストが感じられる

2つめの視点は「近代建築の間違った誤解とエリート建築家による一方的デザイン」である。ワークショップで協力を得た現地の建築家達は都市のコンテキスト(文脈)を大切にしており、彼らの目から見るとオスカー・ニーマイヤーの作品への批評は厳しかった。その理由は建築を過去の如何なるコンテキストも取り入れずに一方的にデザインしている点である。そして、評判の高いルナ・ボ・バルディー設計の改修事例などを好んで紹介した(写真1)。しかし興味深いのは、建築単体としての批判はあったが、ブラジリア全体の都市計画の理念に対する批判的コメントがなかった点である。

2—ブラジリアの理念とデザイン

●1 都市計画の理念

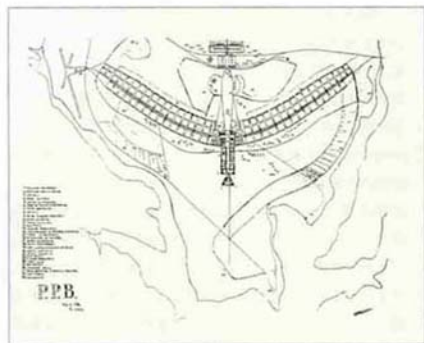
1822年の独立以来、首都をリオという海岸部ではなく国の内陸部に移す構想は、長く実施に移されなかったが1955年、大統領になったジェスセリウス・クビチェックによる大英断として遷都が実行された。その都市計画としてコンペによって選ばれたのは建築家ルシオ・コスタである。彼は近代建築の理論を構築した建築家コルビュジェに強く影響を受け、その理論に基づく新しい近代都市の在り方をブラジリアに提案した。その理念とは、ウルビスとシヴィタスの融合である。ウルビスとは仕事、交通、レクリエーション、居住という4つの要件に対する回答であり、近代都市の理想像とされてきた。シヴィタスとは人間のための生活共同体としての都市を言い表す言葉で、より良い居住空間、オープンスペース、モニュメントで構成される。この2つの融合としての具体的デザインは、東西に長さ10kmに伸びるモニュメンタル軸と南北に弓状に広がる交通軸と称される居住地区で、そ

れらが十字架状に交差し、その交点に交通問題を解決すべく中心地区が設けられた(図1)。

このアイデアで画期的なことは、弓状に広がる交通軸(居住地区)が面的に広がっているのではなく、線的に延びていることである。これは都市の無秩序な拡大を回避し、機能的な発展を前提に計画している点である。その交通軸上に居住と仕事とレクリエーションの各地区が配置された。しかし建設当初、周囲の赤褐色の灌木地帯と人工的な都市が織り成す無機質な雰囲気さが、その後の緑の成熟、生活の成熟を見ることなく批判されたことが、ブラジリアは非人間的都市であるというマイナスイメージを固定化させたと言える。しかし観光客があまり訪れないが、ひとたび居住地区に足を運べば、緑に囲まれたピロティーを持つ集合住宅とそこで遊ぶ子供達を見ることができ、近代建築における1つの解答としての人間の環境を感じることができ(写真2)。都市計画は、長いタイムスパンにおいて評価されるべきであるが、ブラジリアの建設当初に生まれた多くの散漫な批評には、その時代のブラジルの社会背景や時間による成熟の話がスッポリと抜けており、計画的近代都市に対する誤解が生じている。

●2 建築の特徴

さて、その近代都市計画に基づく、上物としての建築はどうか。ルシオ・コスタのコンセプトを受けて起用されたのは、コルビュジェの理念に同調する若く優れた建築家、オスカー・ニーマイヤーである。当時、彼は「近代建築は、期待されている機能主義を支持しつつも、核心的な建設技術に基づかなければならない」と語っている。つまり、ブラジリアにおける彼の作品群には、今日では当たり前となっているガラスのカーテンウォールなど、様々な技術的挑戦が行われている。この新しい技術的挑戦が、一方では評価の対象となり、一方ではそのメンテナンス技術の未成熟の理由から、カーテンウ



■写真1—ルシオ・コスタによるブラジリアの都市計画コンセプト(出典: RELATORIO DO PLAN PILOTO DE BRASÍLIA) ■写真2—歩住宅地に足を踏み入れればピロティーを持つ住宅地は緑に囲まれている(ブラジリア)(写真提供: 渡辺研司)



■写真3—近代的な試みである中央省庁のカーテンウォールには空調設備がはみ出ている



■写真4—オスカー・ニーマイヤーのデザインには曲線美がある(カテドラル・ブラジリア)



■写真5—ブラジリアでは様々な場所で野営生活者の姿を見かける

ールを支える枠の錆びや進歩する設備との不協和音などマイナスのイメージを増幅させている(写真3)。

彼の建築の特徴としてあげべき点は「曲線の美」である。国会議事堂、外務省、カテドラル(写真4)などに見られる大胆な曲線には、彼独自の近代建築を通しての美への追求がある。彼は「私を最も魅きつけたものは曲線の持つ官能性である。雲、川の流れ、美しい女性の体、私の国の忘れ難い山に見られる曲線」と語っている。コルビュジエは厳格な規律と真っ直ぐな線にこだわりを抱きながらも、「オスカー、君の目の中にはリオの山が見えるよ」と言わしめた高い芸術性は、疑いの余地がない。

そうであれば、ブラジルの現代の建築家達が持つ批判は何なのか。その1つは、柔軟性を欠く「完全性」である。彼の作品は近代理論を下地にした芸術性にあり、出来上がった時の完全性に意味がある。従ってその後の時代変遷による使われ方の変化には対応できていない。2つめにブラジルの多様性が近代建築の精神の中にある単純化と普遍性に相反している点である。ブラジルの土着性、風土、文化の特徴は、民族、習慣、思想、色、食事すべてにわたっての多様性のダイナミズムである。それがブラジリアにおける建築の白と、植物の緑、青空のコントラストという単純化された美しさからは決して見出すことはできない。3つめは、利用者の視点が弱く、建築家の一方的な押しつけのデザインとなっている点である。参加型デザインにおける環境の豊かさ、使用者の自然なニーズに答える空間、参加の意識から利用者が街を大切にす気持などサステナビリティの視点はここには無い(写真5)。

3—課題と視点

我々のワークショップで着目したのはこれらの視点である。プログラムの構成としてサンパウロやマーシャルデオードーロ、マセイオという自然に生まれた街において

地域性・土着性を調べ、その良さを見つけて、近代都市ブラジリアで、何らかの提案をするという内容である。ある作品は建築のデザインの多様性を挿入しようと試みたが、ニーマイヤーの建築の完全性は、それを拒絶するのように対比するばかりであった。ある作品は、人なつこいブラジル気質が生む豊かな生活空間を挿入しようとしたが、ブラジリアで適した敷地を見つけることは困難を極めた。そこで浮き彫りになったこれらの課題を通して、今後、どのようにブラジリア自身が変化していくのかがとても興味深い(写真6)。

この課題は、何もブラジリアだけではなく、近代都市すべてに当てはまることである。

ブラジリアがその都市計画と建築において、際だった形で具現化されたが故に、その批判が突出しているのである。遷都をにらんだ今後の都市計画や建築に関して、ブラジリアから学ぶものは少なくない。都市計画の理念の必要性、風土や地域性の特徴から現代化する方法論、利用者参加の街づくりの視点、複数の建築家の参加などがあげられよう。何より、トップダウンの計画ではなく、長いタイムスパンにおけるボトムアップ的な街育てをにらんだ「コミュニティを育てる強い理念とゆとりと曖昧性を持つソフトな計画」という人間と時間軸を大切にしたい方向が今日、求められている視点ではなからうか。



■写真6—元ブラジリア大学教授のリカルド・ファレット氏、サンパウロの建築家カルロス・ティグライウ氏を招いて行ったワークショップの発表会